

「中信考古学会会誌」創刊号より抜萃

長野県波田町中下原遺跡踏査報告書

1984年3月31日

長野県東筑摩郡波田町教育委員会

長野県波田町中下原遺跡踏査報告

大久保 知巳

踏査の動機と結果

東筑摩郡波田町では、昭和56年末より昭和57年初にかけ、同町中波田中下原地籍が、「県営畠地帯総合土地改良事業」の対象地域となり、その工事が実施された。主として畠地帯の道路、排水、畦畔等の改修事業がなされたもので、その委託された事業者は、松本市本庄二丁目の株式会社竹村組であった。

中下原は波田町地籍にあって、南に隣接する山形村との間に、その間に広大な扇状地を形成しており、西方の山側から東方の低地に向けて展開する斜面の、ほぼ中央部分をしめて、標高は約770～785mを記録している。この中下原を南北に分割した場合、その南側地域には山形村の唐沢にかけて、かねてより縄文中期～前期の遺跡所在が知られており、遺跡分布図にもその範囲が記されていた。従って前記工事の折には、関係者間で特段の注意がはらわれて、その対応がなされた。然し、分布図に記された範囲内からは、心配された遺物、遺構の出現は全くなかった。

中下原の最北側で、地形的に扇状地の輪郭線ともなる、やや切れ込みの深い中沢川が、西山間地より東へ流下するが、その沢の右岸添いに平行して、昭和56年もおしまった12月末、道路敷設工事がなされた。そのさい縄文土器片等の遺物出土が知られ、翌57年1月4日、筆者は波田町教育委員会よりの知らせを受け、1月8日現地入りして、町教育委員会、町文化財審議委員、町誌編さん委員各位と共に踏査する。（第1図）

遺物の1部はすでに公民館に収蔵されていたが、それらは縄文中期後半に所属するものであった。現場の道路敷設箇所は支線道路5号として、4m幅で深さ1～1.5mの角状の溝が、西の高所より東の低所に向けて、ほぼ直線状に掘削済みとなっており、深い切りとりとなっていて、すでにこの日午后には、業者により溝内に砂利敷が、0.5～1m位の厚さでなされる段どりとなっていた。現場での朝方は零下10度余と厳しい寒さに包まれ、大地は完全に凍結しており、切りとりの北壁は南からの陽光をうけて、若干ゆるみをみせたが、南壁は全く陽当りを受けて、5cm程にふき出した霜柱に全面覆われて、終日溶解しなかった。依って全員が寒さともたかいながら、北壁、南壁の切りとり断面をけずりおとして精査し、遺物と遺構の検出作業をすすめる。又、溝の底部面は完全にローム層を露呈し、黒色土の残存部分は全くなかった。黒色土の堆積は、総じて50～80cmであり、以下はすでに堀削されたローム層に移行するので、住居址や上払等の遺構がある場合は、そのすべ



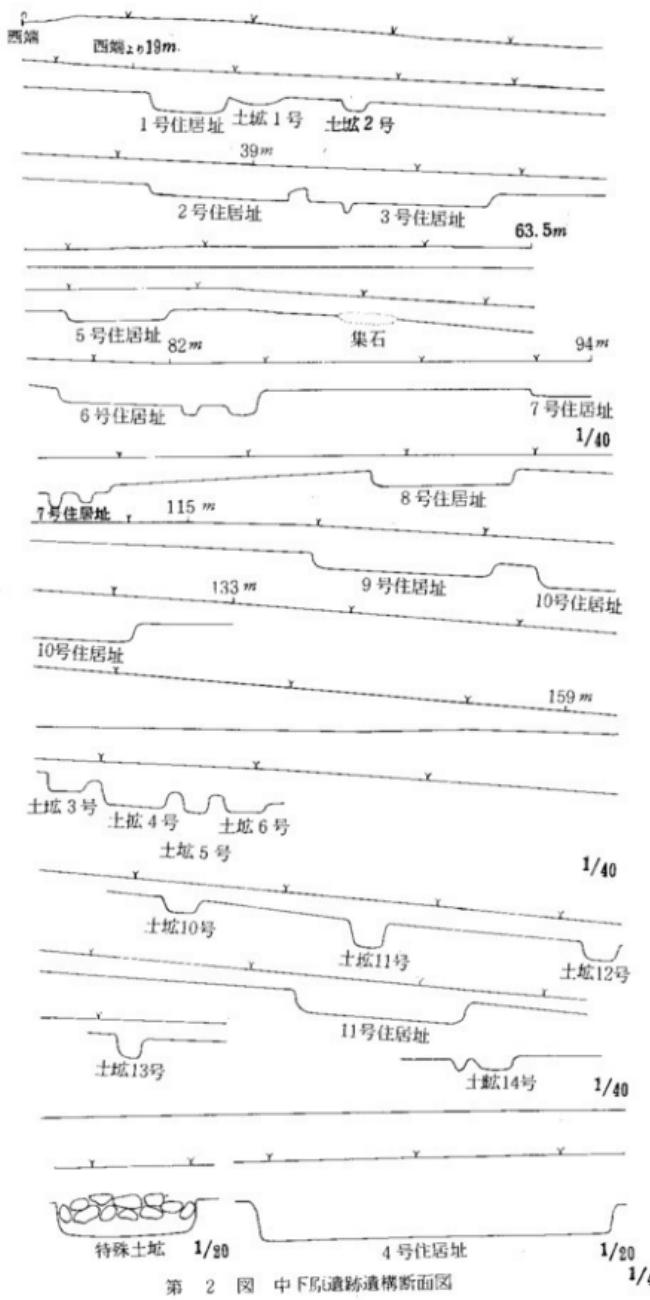
第1図 中下原遺跡位置図（×印）

てが、底部までの輪郭を断面にのこすことになる。

調査は手元が暗くなるまで、北壁、南壁共実施されたが、その結果、住居址が11、上塹14、特殊土塙1、集石1の各遺構が確認される。又、これらの遺構に伴う、縄文中期後半土器片類や土偶、埋甕、石斧類等々遺物を、各遺構別にとりあげ整理する。遺物はダンボール箱へ約2個分を得た。又、各遺構毎に記録写真をとり、計測する。以上の中、北壁断面に確認されたものとして、1~3・5~10号各住居址、1~9各土塙、集石1。又、南壁断面に確認されたものとしては、4・11号住居址、10~14号土塙、特殊土塙内集石1等々があげられる。然しこれらの遺物、遺構は、いずれも壁断面において、それと認められたものであって、その残存遺構を追求のため発掘したり、拡張して立体的な調査結果を得たものではない。従って、あくまで切り取り断面における遺構の観察、遺物の検出にとどまるものであることを、あらかじめ付記しておきたい。

遺構と遺物

中下原の、従来考えられていた遺跡分布地帯を外れた、中沢川右岸沿辺より、予期せぬ遺構、遺物の出土があり、惜しくも破壊された状態で、前記の如く発見されたが、遺構別に遺物も含めて、以下それぞれについて報告にかえたい。尚、住居址や上塙等は、切り取りの西側のものを基点として、順次東へ向い1連番号を付し、それに伴う遺物にも、それぞれに1連番号を付して整理する。



第 2 図 中下層遺跡遺構断面図

住居址

1号住居址（第2図）

北壁の最西部に発見されたもので、表上下70~80cm面のローム層を掘削して、落ち込みをみせており、東西方向の上面径は220cm、下面径は180cmを記し、壁高は西壁がローム上面より60cm、東壁は50cmを示す。床面は周く平坦に仕上げられており、床面上の覆土内に焼石若干を認める。土器、石器等の遺物は検出できなかった。

2号住居址（第3図） 遺物（第3図）・（図版1）

土塹2より約10m東の地点に発見される。表土下約70cm面のローム層を掘り下げてあり、東西方向の上面径は400cm、下面径は約380cmを示す。西壁は約40cmで床面に緩傾斜で降り、東壁は床面より約20cm垂直に近く立ち上り、その後ゆるく20cm程上面を開いて壁をつくる。この住居址は、北側の中沢川端まで約2mの縁辺に所在し、平坦な線を示す床面のはば中央部上に、120×30cmの範囲に焼土や炭化物、石などの堆積と土器片など認めた。おそらく住居址の中心部断面かと思われる。土器は下記の如くで、曾利Ⅱ式期相当に位置づけられるのではないかと思われる。

遺物は数量的にはすくない方で、活用資料も1~16の土器片にとどまつた。これらは施文面から大きく4分類が可能であり、それらの特徴などについて、以下、記したい。

第1類土器（1~9、14）

本類は曾利Ⅱ式に平行する一群で、1~8のa類と、9、14のb類に細分できる。a類は、胎土に微量の砂粒と輝雲母を含み、焼成は概してよい方で、茶褐色及至暗褐色となる。器厚は0.8cmを記し、壁面調整は良好である。1は平縁の口唇を細く集約しており、内壁に横へ張り出す隆起線をめぐらしている。2は波状口縁の波頭部の欠損したものであり、3~8は胸部片である。施文はいわゆる隆線による唐草文を残す類で、他の全面に平行弦線がみたされる。b類は9、14の2例である。共に器厚0.7cm、黄褐色で壁調整のよい胸部と底部破片である。隆線による縱方向の区画をとるらしく、他を全面に繩文施文している。14は底径7cmで、やや小形土器をおもわせるが、底部より強く外傾して、開口しながら立ちあがる。

第2類土器（10~12）

本類は曾利Ⅳ式に相当し、10~12が含まれる。いずれも胸部の細片で全体をうかがえないが、器

厚は0.7cmあるいは1cmを示すものなどある。杉綾状沈線が全面に施される類で、12には蛇行沈線が引かれる。

第3類土器(13)

13の1例のみで、縄文後期中葉の加曾利B式に類似する土器片である。暗褐色の器厚0.5～0.7cmの粗製土器で、平縁の口縁部に2条の沈線が横走している。

第4類土器(15、16)

無文の土器底部を1括した。共に茶褐色で器厚は1cmを記す。15は底径7cmの小形土器の底部で、開度すくなく直に近いたちあがりを示す。16は底径10.2cmとやや大形となり、網代底で開口の度を強くしている。

3号住居址(第2図) 遺物(第4図)・(図版2)

2号住居址より東へ約450cm程はなれた地点に位置し、北壁断面より中沢川端までは、150cmの間隔しかなかった。おそらく住居址の川寄りの1部は、浸蝕により欠落しているものと思われる。東西方向の上面径は540cm、下面径は500cmでやや大形住居を示している。壁高は東西共、ローム面下40cmで床面に連する。床面は平坦で固い仕上げとなる。出土遺物は上器類若干で、曾利Ⅲ式期相当が主体をしめる。

出土遺物で活用し得る資料は、土器片として1～15までがあげられる。これらは大別2分類が可能である。

第1類土器(1～10・13～15)

曾利Ⅲ式に平行する土器で、1～10・13～15が含まれ、更にこれを施文面等からa～d類に細分する。

a類は1～6が該当する。いずれも胎土に砂粒を含み、1と6には輝雲母も含まれる。又、器厚は6の0.7cmを除き他は1cmの厚手となる。1は口縁部の唇部を欠いた破片で、どっしりした橋状把手が特徴的である。太い隆線による横帯区画があり、その内部に斜繩文が施される。2～6は胸部破片で、平行する凹線垂下による縱長の中広い区画があり、斜繩文が全面に施される。5には更に繩文内に蛇行する沈線がおりる。

b類は7～9が含まれる。いずれも沈線施文土器となり、器厚は0.7cmの中厚手を示す、暗褐色の胸部破片である。7、8は沈線が細かく密に引かれ、9は中位で間をおいている。

c類は10の1例のみである。器厚0.9cm、胎土に砂粒を含み、茶褐色となる胸部破片である。平

行沈線垂下による縦位の区画内に、杉綾状の沈線文を残す。

d類は13~15の土器底部を1括した。共に焼成よく茶褐色となり、胎土に微量の砂粒を含む。立ちあがりの器厚は1cm、底部は2cmの厚手となる。底部径は13は9cmで無文となり、14は10cmで網代底となって、外器面に縄文が残る。15は底部径15cmと大きく、網代底で外器面は無文となる。器の立ちあがりは、いずれも外傾の度を増して開口する。

第2類土器(11、12)

曾利V式に平行すると思われる資料で、同1個体の口縁部11と、底部12が含まれる。黒褐色で壁面調整は至極良く、器厚は0.6~1cmと部分により異なる。11は波頂部に小さな橋状把手をもつ口縁部であり、12は底部径7.8cmを記す、やや小形土器を想像させる。器は底部より外傾の度をまじて立ちあがるが、外器面には沈線による縦方向の、ワラビ手文が垂下して区画をとり、その内部に八の字状沈線を縦位に、幾条にも並列させており、口縁部には、尚、小粒の刺突文を加えて、施文効果をあげている。

4号住居址(第2図)

南壁に検出された住居址で、断面による遺構の規模は、東西方向に上面径が525cm、下面径は495cm、壁高は西壁45cm、東壁60cmとかなりの大形を示す。床面は平坦の線を示し堅緻であった。床面上覆土中に、木炭化物と若干の石を認める。遺物は得られなかった。

5号住居址(第2図)

3号住居址より東へ約20m寄り、5号住居址が所在する。規模は東西方向の上面径約310cm、下面径270cmで、壁高は東、西共30cmとなる。床断面は平坦で、覆土中に遺物等は得られなかった。

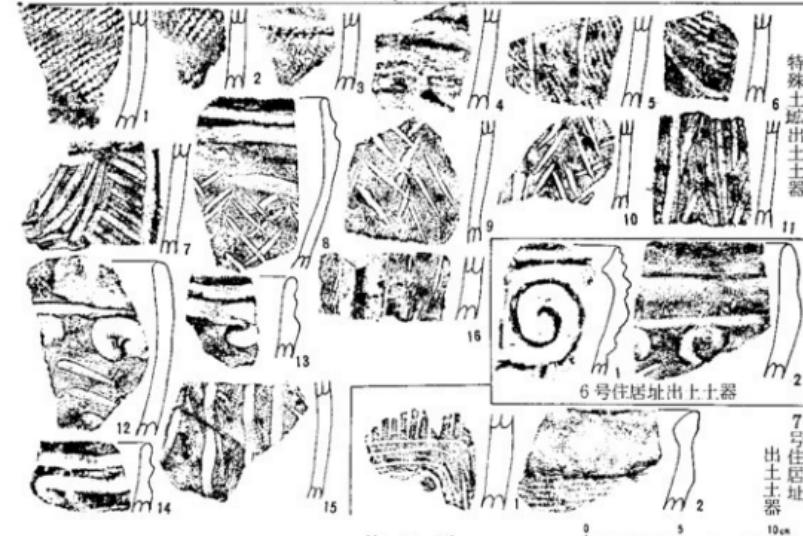
6号住居址(第2図) 遺物(第3図)・(図版1)

5号住居址の東方480cmの位置に発見される。東西方向の上面径約6m、下面径566cm、壁高は東西共に約36cmである。床面線は平坦堅緻であり、址内東寄りの床面に2箇所のピットを認める。その中、東壁に接したピットは、上面径86cm、下面径70cm、深さ30cmのタライ状を呈し、その西に所在したピットは、上面径50cm、下面径40cm、深さ30cmの主柱穴の1を思わせた。西寄りの覆土中に30×15×12cmの石1個と、床面上に縄文中期後半土器片を微量得る。

6号住居址出土の遺物活用資料は、土器片の僅か2例である。1は曾利I式に平行するもので、暗褐色となり、器厚0.7cmの平縁口縁部であるが、口唇が内湾しながら細まる。又、口唇の内側に蓋受けの、横に突出した隆起帯がめぐる。太い降起線による渦巻文が残される。2は曾利V式相当



2号住居址出土土器

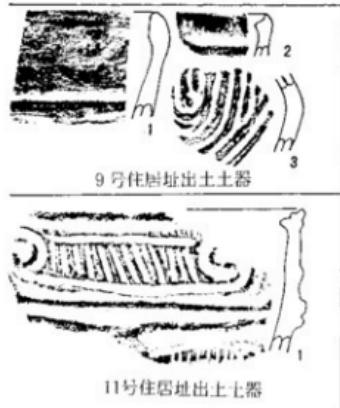
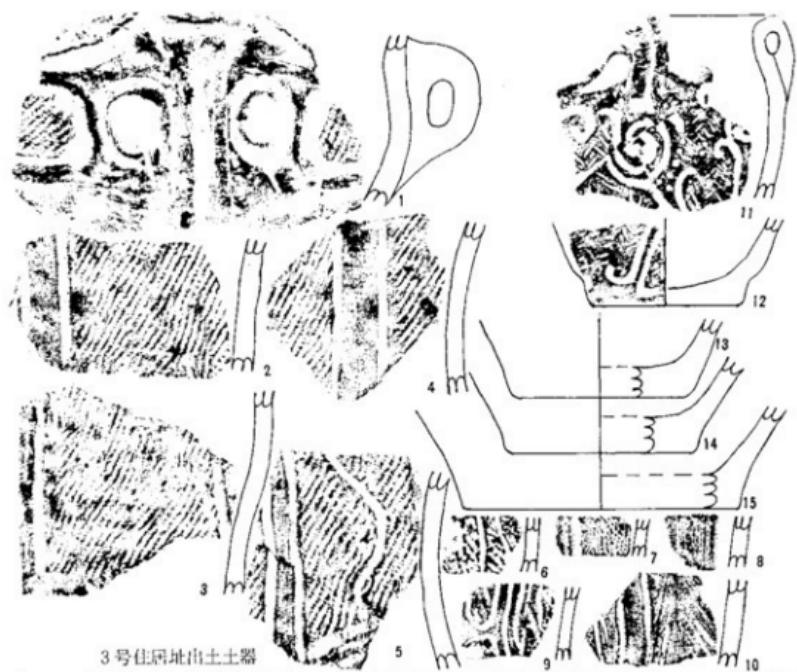


特殊土壌出土土器

6号住居址出土土器

第3図

7号住居址出土土器



第 4 図

の土器片であり、暗褐色で胎土に砂粒を含む。器厚1cmの平縁口縁部で、口唇に平行する浅い凹線が2条横走による無文帶があり、その下部にワラビ手文の退化した、頭の部分の円形状凹文が残る。

7号住居址（第2図） 遺物（第3図）・（図版1）

6号住居址の東約3mの箇所に7号住居址が所在した。規模は東西方向に上面径約4m、下面径約370cmで、床面は平坦な線を示す。壁高は東西共約20cmを記す。床面に柱穴と思われるピットが2箇所に残る。その1は上面径44cm、深さ40cm。その2は上面径50cm、深さ36cmであった。覆土中に微量の土器片を得る。

出土遺物の中、活用し得る資料は1、2の土器片である。1は曾利I式に含まれる土器の胸部破片で、暗褐色となり、胎土に輝雲母を含む。器厚は1.2cmと厚く、比較的整った直、曲の平行沈線が施される。2は曾利II式相当の土器片であり、暗褐色で内壁の調整はよく、器厚1cmを数える。平縁の口縁がやや内湾しながら立ちあがり、口唇を肥厚させた後、強く内そぎしている。無文帶を僅かにもち、以下に斜縄文が残される。

8号住居址（第2図）

7号住居址の東約740cmを隔てて、8号住居址が検出される。規模は東西方向に約4m、壁高は西壁が50cm、東壁が44cmを示し、床面は平坦線を示す。床面上に礫の遺存がみられたが、遺物の検出はなかった。

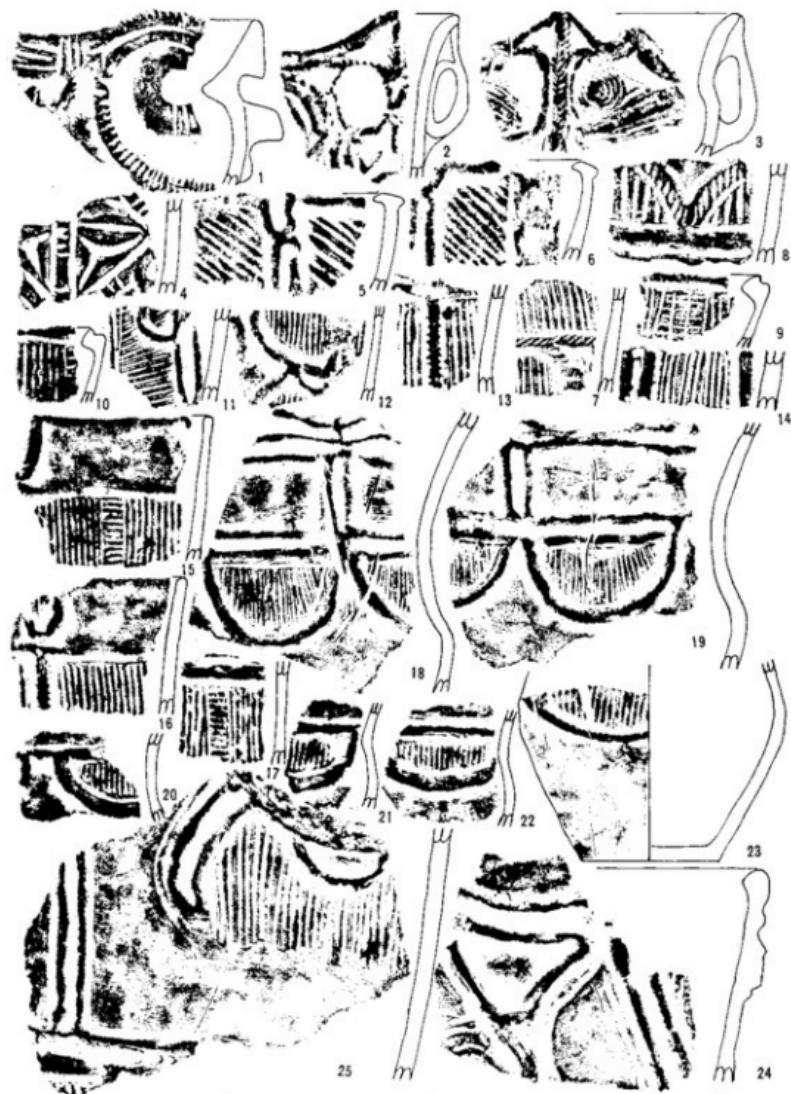
9号住居址（第2図） 遺物（第4図）・（図版2）

9号住居址は、8号住居址より東約18m離れた地点に所在する。東西方向の上面径530cm、下面径500cm、壁高は東西共42cmを記す。床面は平坦線を示し、かなり大形の住居址を想像させるが、出土遺物はすくなかった。

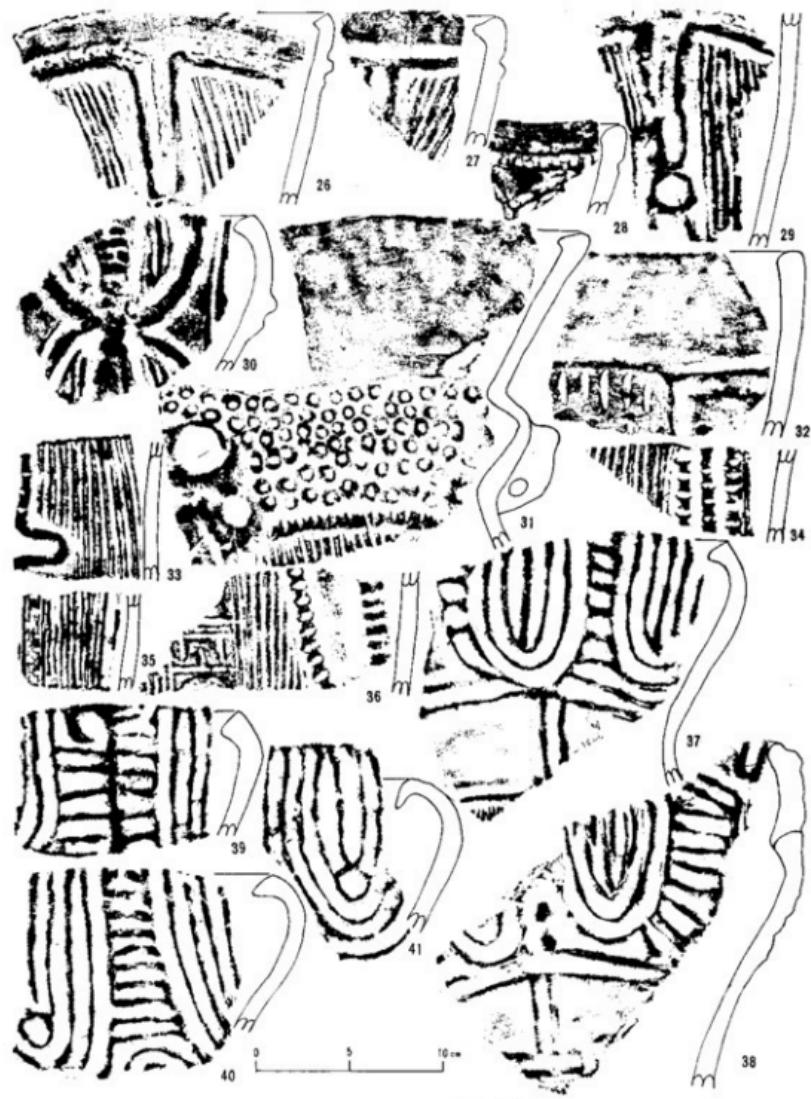
本址の出土遺物も1～3の土器片にすぎなかった。いずれも曾利I式相当とみられる土器である。1は器厚0.8～1cmを示す茶褐色の、壁面調整のよい平縁部である。無文帶と隆起線が1条めぐる。2は器厚0.7cmの平縁部で、口唇近くの器の内外に、鶴状に突出する隆起線がめぐる。3は暗褐色で胎土に輝雲母を含む。器厚は0.7cmで、口唇が内湾する重腹文土器である。この土器はあるいは曾利II式に含まれるものかも知れない。

10号住居址（第2回） 遺物（第5図～第10図）・（図版2～5）

9号住居址の東僅か125cmに隣接して、10号住居址は所在した。東西方向の上面径は約550cm、下面径は500cm、壁は東西共ゆるい傾斜で平坦な床面に接し、壁高はいずれも60cmを記録していく。



第 5 図 10号住居址出土土器



第 6 图 10号住居址出土土器



第 7 図 10号住居址出土土器

大形で深い住居址を想像させる。床面上には9号住居址とは対照的に、豊富な遺物類が包含されており、その種類も別項の如く多彩を極める。

本址出土遺物は、今回発見された中下原遺跡の全遺構中、最も多量であった。これらの遺物は石器として打製石斧3、土偶1の他、土器類が主体をしめるが、分類整理の結果、6分類が可能であり、その上限は繩文中期前半の井戸尻期に、下限は同後半の曾利N式期に、位置づけられるものであった。以下、これらの遺物について詳述する。

土器（第5図～第8図）・（図版2～5）

第1類土器（1～30・32～36）

本類は繩文中期前半の、井戸尻式期に相当するものである。施文のあり方から、これらは更にa～cの3分類が可能となる。

a類 1～4が含まれる。1は黒褐色を呈し、胎土に多量の輝雲母を含む。口縁が内湾しながら1.5cmと肥厚して立ち上がり、内縁を形成した後、口唇部が外反する形を示す。ゆるやかな波状部に耳状突起があり、これを囲む隆帯上に連続する爪形文を施す。三又状の陰刻文も特徴的である。2は器厚0.6cm、3は0.9cmの黒褐色系土器で、共に山形状突起をもち、その下部に橋状把手が付加される。個体を別にするが、施文面でも三又状陰刻文が共通して施される。4は焼成よく茶褐色となり、胎土に輝雲母を含む。器厚0.5～0.8cmの胸部で、刻目をもつ隆帯内に三又陰刻文をのこす。

b類 5～30が含まれる。隆線による方形区画内に、整った沈線をみたしたり、あるいは櫛形文を残す類である。総じて焼成はよく茶褐色系をとるが、暗褐色となるものもある。胎土は良好で輝雲母を含むものがあり、内外の壁調整が良好となるものが多い。又、器厚は0.5cm位のもの、0.8cm前後のもの等が多く、1cmをこえるものもある。5と6は同一個体と思われるもので、平縁の口唇上に1.5cmの巾広い面とりがある。7、8は胸部破片で、刻目をもつ隆帯区画内に、整った縱方向の沈線が密に施される。9、10も同一個体とみられるものである。平縁の口縁が複合状を呈するが、器は外傾しながら開き、口唇近くで僅かに内弯している。口縁部に縱方向あるいは格子状の沈線文様がある。11～14は共に胸部破片、15～17は同一個体の口縁部と頸部破片である。いずれも隆線区画内に、整った同方向の沈線を密に施す。又、12～14の隆帶の両側には、やや刺突状の短かい押引文が密に連続している。15、16は平縁口縁部で、口唇上に0.6cmの面取があり、器は底部に向い直行する円筒形を示す如くである。18～23はいずれも櫛形文の施された1群の土器である。器形は胸部であり、頸部にかけ大きく開きながら立ちあがり、口縁部にかけて内傾する上半部と、集約した胸部から、底部にかけては球状のふくらみをもつ下半部への破片である。隆帶による方形区

画内を無文とし、特徴的な櫛形文を横に連続する。23は同様器形を示す底径7.4cmの底部である。24は波状口縁部で口唇に1cmの面取りがあり、器形に変化なく底部に向い直走する深鉢形を示す。25はその胴部破片で、施文は隆帶による三角状あるいは不整形の区画をとり、隆帶添いに連続刺突文あるいは沈線文が、平行的に施される。26、27は口唇内側に張り出し部をつくり、共に巾広い面取をもつ平縁である。前者は1cm、後者は1.5cm巾となる。28も平縁であるが、口唇近くを肥厚させている。29は頸部辺の破片、30は頸部より内窓しながら開口する平縁で、口唇に1cm巾の面取りがある。施文は粘土紐による櫛形状の区画を背合せし、更に縦方向の粘土紐を渡して連接し、区画内に沈線をみたしている。

C類 32～36が該当し、中期前半に含まれるであろう土器をまとめる。32は内面暗褐色、外面黒色を呈し、胎土に砂粒を多量に含む。器厚は1～1.3cmの厚手土器で、壁面調整のあまりよくない、平縁口縁部の破片である。口縁部に巾広い無文帯をおき、頸部に隆帶区画をとり、その内部にまばらな縦方向の短沈線が、断続的に施される。33～36は隆帶による区画と、その内部に縦方向の沈線文が密に施される1群である。共に暗褐色を呈し、胎土に微量の輝雲母を含むが、特に36は多量の砂粒が混入され、器厚0.9と厚く、他は0.7cmの中厚手となる。34、36は隆帶上に太目の刻目がある。

第2類土器（31、37～50）

縄文中期中葉の曾利I式相当土器をまとめる。頸部に特殊な施文と、主として重弧文の施された一群の土器を扱う。焼成はよいものの、黒褐色系の色調をとるものが多く、胎土に殆んど輝雲母の含有がみられ、その量が多となるものもある。器厚は1cm以上の厚手となるものが大部分である。31は壁面調整のよい土器で、口唇上に1.7cmの巾広い面取をもつ。器形は底部より胴部に大きくふくらみをもって立ちあがり、頸部で一旦しまった後、断面が球状の小さな張り出しをつくり、更に集約した後、口縁に向い極端に外傾して開口する形を示す。口縁部は巾広い無文帯となるが、頸部の張り出し部全面にわたっては、その径が1cm程のボタン状の貼布文が整然と密接して付加され、その各貼布文の中央部分を上面より深く刺突して、剥落を防ぐと共に、施文効果をあげている。1見して蜂の巣状でもあり、蛸の吸盤の様である。頸部には小形の橋状把手が、相対的に6個程設けられるらしい。胴部にかけでは、縦方向の沈線が整然と施される。器形あるいは施文面で、特殊な用途の土器を思わせる。37～50は、口縁部にいわゆる重弧文の残される一群の土器である。37～39は同一個体と思われるもので、口唇部は内傾しながら、1.2cmの面を形成する。壁面調整はよく、特に内壁は研磨の跡をのこす。40～43も同一個体で同様器形を示す。これらは、本末平縁であるが、部分的に波状突起部をもつらしく、38にはそれがうかがえる。施文はいずれも口縁部に、粘土紐貼布による重弧文と肋骨状文が、横に連続して残される。40、41には重弧文の中心に円形文が付加さ

れる。42、43には太い隆帯上に、粘土紐を貼布した加飾がある。又、37、38の頸部は粘土紐による方形区画となり、内部は無文で、張り出す副部にかけては、縦方向の細かく密な沈線文が引かれる。44、45は重弧文とはやや趣を異にする、粘土紐の縦方向に連続する、折たたまれた施文が残される。又、口唇の内側への巻き返りが少くなく僅かばかりとなる。46は口唇部巾1.2cm、重弧文と肋骨状文が残る平縁。47、48は口唇部巾1.5cm、中形の重弧文を背合わせて上下に施す。49、50は口唇の内側への巻き返りがやや強い。重弧文の在り方に変化があり、重弧文の隆線間を粘土紐で短絡しながら連続して区切り、1見太い凹みを残す刺突状の文様効果を残している。

第3類土器（51～71）

縄文中期後半の曾利Ⅱ式に平行する土器で、施文のあり方から更にa～cに3分類する。共通していることは、焼成はよく、茶褐色及至暗褐色を帯びるものあり、殆んどの土器が胎土に砂粒と輝雲母を含む。器厚は0.6cm前後のややう手づくりとなり、壁面の調整はよい。

a類 51～56の刺突文施文土器が含まれる。51～53は同1個体と思われる副部破片で、器は口縁より底部に向い直行する形を示す。施文は微隆線による縦横の方角区画をとり、その内部に細かな連続刺突文を、横位に整然と幾段も重ねて施している。54は平縁の口縁部で、口唇部の内側への巻き返りを強くしており、横位へ連続刺突文が何段も施される。55は平縁口縁部で、口唇上に深い刻目をもち、僅かな無文帶の下に平行沈線と横位刺突文をのこす。56は胸部破片で、短沈線状の当面が、細長い施文具で横位の連続刺突文を何段も重ねている。

b類 57～67の縄文施文土器が該当する。いずれも壁面調整をよくしており、57、58が平縁の口縁部、他は副部破片である。57、58は共に口縁部に僅かな巾の無文帶をもち、微隆線を1条めぐらして、その下部に斜縄文を施す。59は縦方向の整った平行沈線、60～62は整った浅い平行凹線による区画をとり、それぞれ内部に斜縄文を施す。63～65は断続する短かい斜縄文が、又、66、67は全面に斜縄文が施される。67の縄文は微細である。

c類 68～71が含まれ、隆線による渦巻文、平行沈線や蛇行文をのこす類である。共に焼成よく茶褐色系となるが、部分的に暗色のまだらを残す。胎土に砂粒を多く含むが、ことに68、69、71には輝雲母の含有が多である。又、内壁の調整をよくしている。68は器厚0.7cmの頸部破片で、微隆線による文様帶を残すが、沈線あるいは低い粘土紐貼布による、蛇行文が特徴的である。69、71は器厚1cmと厚く、隆線による渦巻文あるいは蛇行文を配し、他の器面を全面に斜縄文でみたす。70はやや巾広い隆線蛇行文と縦方向の平行沈線を施す。

第4類土器（72～75）

72～75が含まれ、曾利Ⅲ式に平行する土器である。いずれも副部破片で暗褐色系が多く、胎土に

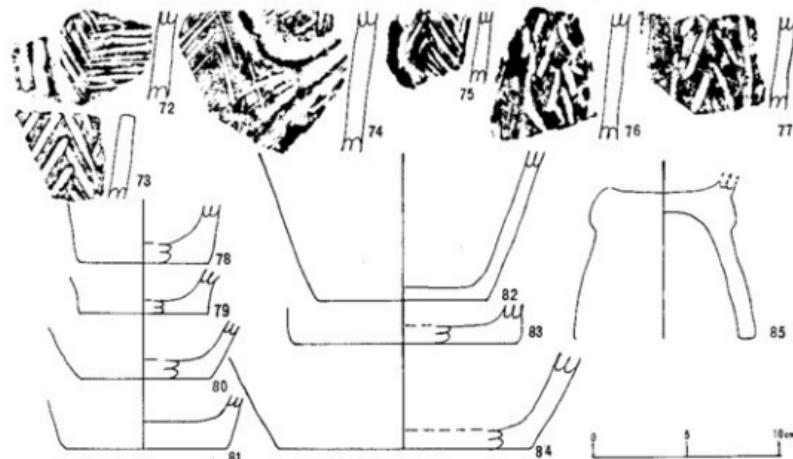
砂粒を含み、器厚は72、74が1cm、他は0.7cm位である。曲線状の隆線のはしりがあり、杉綾状の沈線がやや密に施される。

第5類土器（76、77）

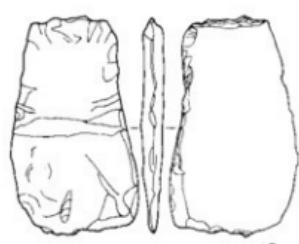
本類は76、77が含まれ、曾利N式に相当する同一個体かと思われる土器である。器厚0.8cm、茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。巾広く浅い短かい凹線が、杉綾状にややまばらに施される。

第6類土器（78～85）

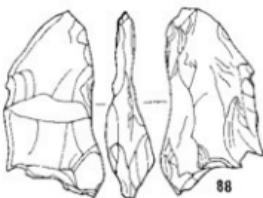
本類は78～85の土器底部を括した。いずれも焼成よく茶褐色となり、胎土に砂粒を比較的多く含む。84には輝雲母も多い。78～80は底部径が共に7cmとなる。78は網代底の無文土器で調整痕があり、79は縦方向に区画をとるらしい、間隔をおいた平行沈線がさかる。80は無文、81は底径8.8cmで網代底となり、縦方向に間隔をおいた平行凹線が垂下する。82は底径9.4cm、無文であるが、縦位、横位の擦痕が残る。83は底径12cm、84は13.6cmと大形化し、それぞれ無文となる。器の立ちあがりは、78、79、81、83が底部より直立に近い急な成形を示し、80、82、84は外傾して開度を増しながら立ちあがる。85は高台付土器の底部で、高台の下部径は10cm、その高さは6.6cmである。器の立ちあがり部より欠損していて、上部器形は不明であるが、類例すくなく、特殊な用途があったものと思われる。



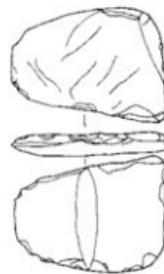
第8図 10号住居址出土土器



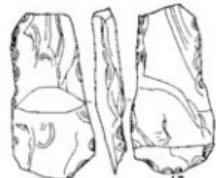
87



88



89



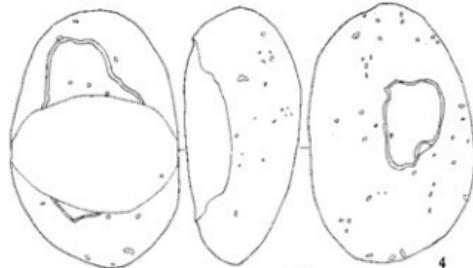
17

特殊土塚出土石器



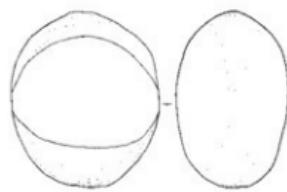
2

11号住居址出土石器



4

土塚 4号出土土器



土塚 3号出土土器

0 5 10 cm

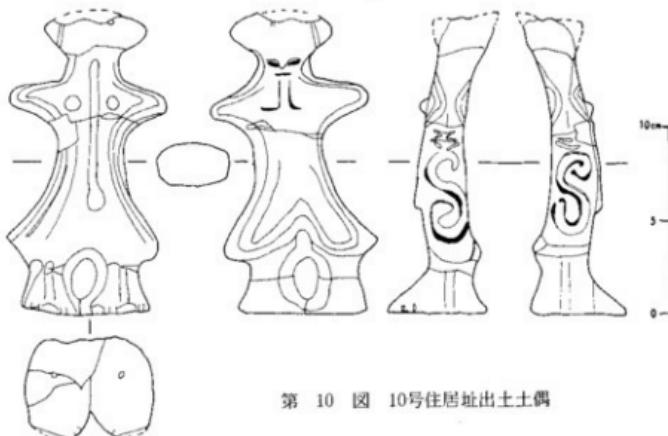
第 9 図

石器（第9図）

10号住居址出土石器は、87～89のいずれも打製石斧である。この中、87は長さ11.7cm、最大巾6.8cm、厚さ1cm、重量130gの完形品である。ややクサビ形の板状を呈し、縁辺に打ち欠きの調整痕をのこす。88は端部を欠いており、現存の大きさは長さ10cm、最大巾4.8cm、厚さ1～2.4cm、重さ130gである。荒い打ちかきの跡をのこし、器内の厚さも不揃で調整はあまりよくない。材質は粘板岩とみられる。89は小形で現存の長さ8.3cm、巾5.8cm、厚さ1.1cm、重さ80gの両面偏平を呈するクサビ形である。チョコレート色をしたチャート質で、縁辺への二次加工は概してすくない。

土偶（第10図）

出土した土偶は、頭部、胸部、胴部、脚部に欠損し、更に脚部は4片に割れて、それぞれ近くの覆土中より発見される。ほぼ完形に近いが、胎土に多量の輝雲母と微量の砂粒を含み、焼成よく概して暗褐色を呈する。肌の調整仕上げはよい。全体の形は鳩胸出尻で、脚部の座わりは広く、胸部より頭部にかけてやや強い外反りとなる。重量は300g、総高は現存で16cmであるが、完形時は16.5cm位と推測される。頭部は横に橢円状に長く5.6cmとなり、その頂部の1部が欠損し、顎部が全面に剥落して、惜しくもその面相を失している。胸部より左右の両手は水平状に横にのばしており、その部の最大長は8.5cmである。胴部は3.8cm、厚さ2.5cmと細まった後、腰部は再び横への張り出しがみられ、最大巾は8.5cmを数へ、胸部と同じ数値を示している。脚部は底部面が横位に7cm、縦位に約5.5cmの短橢円状を呈する平坦面を形づくり、立像の安定感をよくしている。脚部はその前面中央部より後へ貫通する、 1.5×2.2 cmの縦位橢円状の穿孔があり、長さ約3cmの短かい左右の脚を分けている。この土偶は、左右の両側面と表裏面が平板状となり、その断面はほぼ長方形を呈している。頭部の欠損部2箇所に、土偶を吊すための紐通しの小穴とみられる跡が残り、更に製作時に頭部と頸部を固定連結するために入れたと思われる。短かい竹釘の跡と思われる小穴が、その中央部分に残る。又、脚の底部面に小穴が2箇所残るが、土偶を立てるとき、竹釘等で固定したものであろうか。土偶の表面には、首より腹部の中央部にかけて、縦に垂下する巾0.5cm、長さ8cmの陰線があり、胸部には乳房をあらわす、円形突起の貼布がある。又、首、腕、腹、腰までにいたるその体の左右両縫に、2条の平行する沈線がめぐらされている。両脚の前面及び側面には、それぞれ縦方向の平行沈線が引かれる。背面には首の部分に、陰刻された眼、鼻、口が描かれ、胸部にかけて罫を模した様な沈線がたれ下がる。背より腰部にかけての縁辺は隆起線がめぐり、更に首より腰部にわたり、平行する沈線もめぐる。左右の側面には、沈線による長さ4.8cm、横巾2cmの大きさの、特徴的なS字状文が描出され、その上部にもそれぞれ陰刻文がのこされる。



第 10 図 10号住居址出土土偶

11号住居址（第2図） 遺物（第4図・第9図）

土塹12より東へ 790cmはなれ、11号住居址が検出される。規模は上面径 510cm、下面径 450cm、西壁約70cm、東壁は約30cmで、平坦な床面よりゆるやかな立ち上りをみせて、ロームの上面に結ばれていた。址内覆土中に、微量の遺物を得たにとどまる。

11号住居址より採取された遺物の中、活用し得るものは、僅かに土器片1と、スクレイバー状石器1のみであった。土器片は平縁の口縁部で、焼成よく黄褐色となる。内壁の調整をよくし、器厚は1cmと厚く、口唇は若干内側へはり出させて、1~1.7cmの巾広い面とりを形づくる。器形は底部に向い直行する鉢形を示す。口縁部に隆線による横帶区画があり、その内部に平行沈線や、沈線による渦巻文を残す。曾利I式相当土器である。石器は硬砂岩のフレイクを利用した、スクレイバー状の石器で横形を呈する。横位の長さは8.8cm、縦位の巾は5.3cm、厚さはつまみの部分が1.5cmと厚く、刃部は細かな調整痕をのこし、両面より鋭く集約している。

土 塹

土塹1（第2図）

1号住居址の東壁に接して発見されたものである。表土下約70cm面のロームを掘り下げており、その東西方面の上面径は150cm、深さ約25cmの鍋底状を呈する。土塹内には、こぶし大~人頭大の

礫石が多く、その殆んどは割石、焼石等であった。遺物出土は認められなかった。

土塹 2 (第 2 図)

土塹 1 より東へ約 140cm の地点に所在する。表土下 66cm でローム上面に達し、東西方向の上面径は 80cm、下面径 56cm、ローム上面よりの深さは 34cm であった。礫石や遺物等を伴わなかった。

土塹 3 (第 2 図) 遺物 (第 9 図)

北壁に発見された 10 号住居址から、東へ約 47cm 程はなれて土塹 3 が所在した。規模は上面径 110cm、下面径 100cm、深さ約 50cm を記録する。土塹内より石器出土があった。

出土した石器は磨石で、大きさは長さ 9.5cm、巾 8cm、厚さ 5.8cm、重量 600g の鶏卵大の磨石である。花崗岩質で白茶色を呈する。全面に磨り込みの跡をのこして滑らかとなり、長軸の両端部に僅かな打痕をのこしている。

土塹 4 (第 2 図) 遺物 (第 9 図)

土塹 3 より東へ 40cm はなれて土塹 4 が隣接する。規模はやや大形となり、上面径 180cm、下面径 160cm で深さは約 64cm を示す。内部より石器出土を認める。

出土石器は磨石で、大きさは長さ 13.7cm、最大巾 9cm、厚さ 6.2cm、重量 1070g で、かなり重量感のある鶏卵形を示す。花崗岩質とみられる石材であるが、火熱を強く受けて灰褐色に変色しており、両面の肌に剥落した跡をのこしている。細かな小穴を表面にもつが、磨石としての長期にわたる活用のためか、滑らかな磨面を残している。

土塹 5 (第 2 図) 遺物 (第 4 図) • (図版 2)

土塹 4 より東へ僅か 40cm はなれて発見される。表土下 80cm のローム面を掘り下げてピットとしており、その規模は上面径 80cm、下面径 56cm、深さ 60cm であった。土塹内より微量の遺物を得る。

出土遺物で活用し得る資料は、土器片として 1 ~ 3 までがあげられる。1、2 は同 1 個体と思われる、縄文中期後半の曾利 I 式に相当するものである。共に暗褐色となり、胎土に微量の砂粒を含み、器厚は 0.8 ~ 1cm となる。1 は平縁の口縁部で、口縁部に無文帶とやや太目の隆起線を 2 条横走させ、以下に斜線による渦巻文と、縦方向の平行沈線を引いている。2 はその胴部にあたるものであろう。3 は曾利 III 式相当と思われる破片で、茶褐色となり、胎土にやや多い砂粒を含む。器厚は 0.6 ~ 0.8cm と部分的にむらがある。平縁の口縁部に、平行沈線が 2 条横にめぐり、更に縦方向にも平行沈線が垂下するらしく、その区画内に縄文が施される。

土塙 6 (第 2 図)

土塙 5 の東40cmをおき土塙 6 が所在する。表上下80~100cmに遺構があり、その上面径は 130cm、下面径は 100cmで、西壁は50cm、東壁は30cmであった。土塙内より遺物等を認めなかった。

土塙 7

土塙 6 より東へ 140cm の間隔をおき所在する。その上面径は約70cm、深さは30cmであった。内部に遺物等を認めなかった。

土塙 8

土塙 7 の東40cmの間をおき、表土下90cm面に土塙 8 が所在する。上面径約55cm、深さ約30cmで、石礫や遺物等を認めなかった。

土塙 9

土塙 9 は土塙 8 の東 120cm の箇所に所在した。上面径38cm、深さ約30cmで遺物等を認めなかった。

土塙10 (第 2 図)

土塙10~14はいずれも南壁の断面に発見される。土塙10は、表土下45cm面のローム層に落ち込むもので、上面径 120cm、下面径70cm、深さ 50cm の規模であった。内部に遺物等を認めなかった。

土塙11 (第 2 図)

土塙10の東 420cm はなれて所在し、上面径 120cm、下面径80cm、深さ 80cm を記録する。内部に人頭大の石 2 個が含まれていた。

土塙12 (第 2 図)

土塙11より東へ 560cm の間をおき土塙12が発見される。上面径 116cm、下面径80cm、深さ 60cm の規模で、遺物等なし。

土塙13 (第 2 図)

11号住居址より東へ、2235cm はなれた箇所に、土塙13が発見される。表土下約50cmのローム面下に、上面径90cm、下面径50cm、深さ 60cm の落ち込みを残す。遺物等出土なし。

土塙14（第2図）

土塙13より約20m東の地点に本遺構が検出される。上面径120cm、下面径90cm、深さは45cmであった。遺物等を認めなかった。

特殊土塙（第2図） 遺物（第3図・第9図）・（図版1）

本址は土塙として処理すべきものであろうが、その内部の様相が他の土塙とは趣を異にするので、特殊土塙として報告したい。

南壁断面に所在しており、落ち込みの規模は、東西方向の上面径が200cm、下面径が170cm、深さは55cmを示す。底部に約20cmの真赤な固い焼土が全面に堆積し、その上部の土塙内に、40×25×8cm程度のかなり大型の河原石が約20個程、焼土灰と粉末炭化物に混じて所在した。遺物若干の出土をみる。

遺構内より検出された遺物は、僅かな土器片と打製石斧1であった。土器片は分類整理し記述すると、下記の如くである。尚、土器は第3図、石器は第9図におさめる。

第1類土器（1～6）

縄文施文土器をまとめる。いずれも胴部破片で焼成よく、総じて茶褐色系をとる。微量の砂粒を含み、器厚は0.8cmの中厚手を示す。1は3と共に壁面調整をよくし、施文具への力の強弱による断続的な斜縄文を施す。2は斜縄文で土器片に摩耗の跡がみられ、3は微隆帯が1条横走し、4は2条横走する内部に縄文を転載する。5は浅い巾広の平行沈線内に、6は曲沈線内に斜縄文を残す。

第2類土器（7）

7の1例のみである。曾利Ⅲ式に平行する胴部片で、器厚0.8cm、茶褐色となる。平行する隆線区画内に、巾広の羽状沈線が密である。

第3類土器（8～11）

曾利Ⅳ式相当土器片で、器厚は0.6cm、暗褐色となり、胎土に砂粒を含む。8は平線、他は胴部で、口縁に2条の凹線がめぐり、以下胴部にかけて、粗雑な羽状沈線が引かれる。11は平行沈線垂下による区画内に、巾広で雑な羽状沈線を残す。

第4類土器（12～16）

12～16が含まれ、曾利Ⅴ式に平行する。いずれも胎土に砂粒を含み、暗褐色となる。この中、12～15は施文を同じくしながら個体を別にし、器厚は0.6～1cmとなる。口縁部にワラビ手文の退化した、円状の凹文と浅いまばらな短沈線を残す。16は器厚1cm、縱方向の隆線が垂下し、雨打れ状の短沈線がまばらとなる。

石器は17の打製石斧で、長さ9.1cm、巾4.4cm、厚さ1.6cm、重さ90gを示す小形完形品である。

第1次剥離後の2次調整痕を残し、比較的全体の形はよく、ややクサビ形となり、硬砂岩らしく、断面は凸レンズ状となる。

集 石

第2図の北壁断面に示す集石は、5号住居址より東へ、480cmはなれた地点に所在した。表土下50cm面にその上面をおき、ロームを1部けずり、横に約170cm、厚さ約30cmのレンズ状に集石の堆積を認める。集石は焼石、割石等が多かった。遺物等の混在はみられなかった。

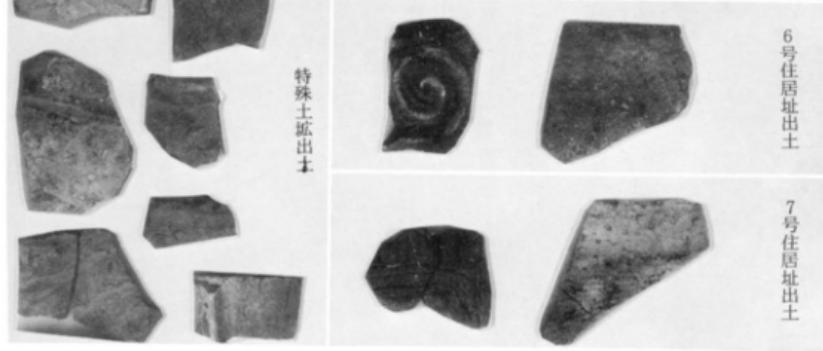
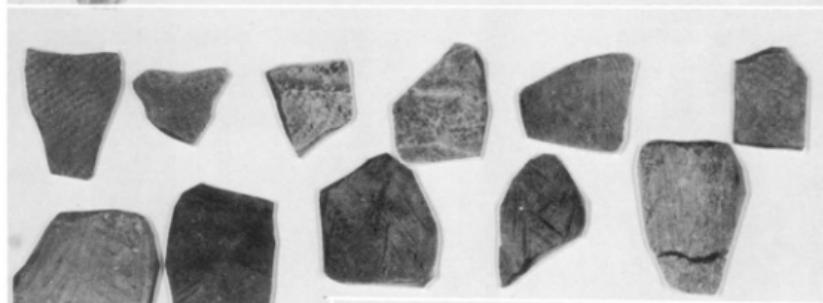
ま　と　め

このたび波田町においては、懸案の中下原の畠地帯総合土地改良事業が実施された。この事業の進捗とともに、当初全く予期されなかった、埋蔵文化財の遭遇をみるといたったが、それは從来考えられていた、中下原の遺跡分布地域を大きくはずれた箇所よりの発見であった。然しその発見は、不幸にして遺跡の破壊というかたちで確認されるにいたったが、この様に当該遺跡に限らず、職者に知られざる中に闇に放り去られる事例も、地方における乱開発の絶え間なく続けられる現状の中では、数多いものと推考される。大形ブルトーザーなど、一挙に何台も発注しての工事とともに、現場にたって、意識的に専門的な眼を大きくひらいて、とびまわってみても、地表の擾乱と変貌は一瞬の間に行われる。ましてや思わずる箇所での発見は稀に近く、しかもなかなかに良好な状態での把握は、至難のことである。

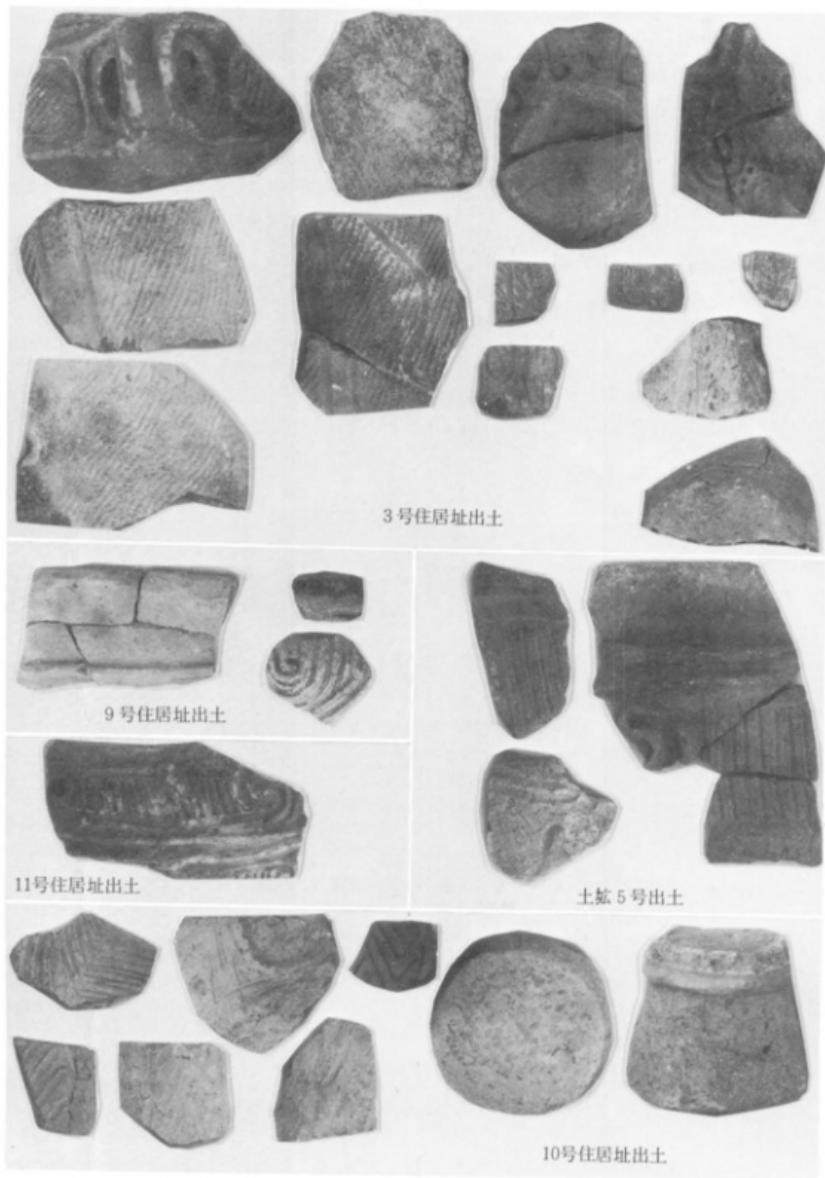
今回はからずも、波田町関係各位の郷土史に対する関心の深さと、埋蔵文化財に寄せる諸注意により、最悪の遺跡埋滅から痕跡的ではあるが、かろうじてまぬがれえたけれども、この踏査によつて確認された、別項記述のごとき遺構の破壊件数は多く、おしみでもあまりある。採集された遺物は、活用しうる範囲でここに集録したが、完形に近い土偶がえられたことはさいわいであった。今後、活用されうる資料と思われる。

本稿をそうするにあたり、遺跡踏査の折、酷寒の中で事務処理を共にされ、又のちに、遺構、遺物の処理にあたって、終始御協力をいただいた町教育委員会の太田憲司、波多賢司、町誌編纂委員会の百瀬克彦、大月康雄、百瀬光信、町文化財審議委員会の田中昭三、塩原敬一郎各氏、および関係各位に対し、深甚なる謝意をここに表します。

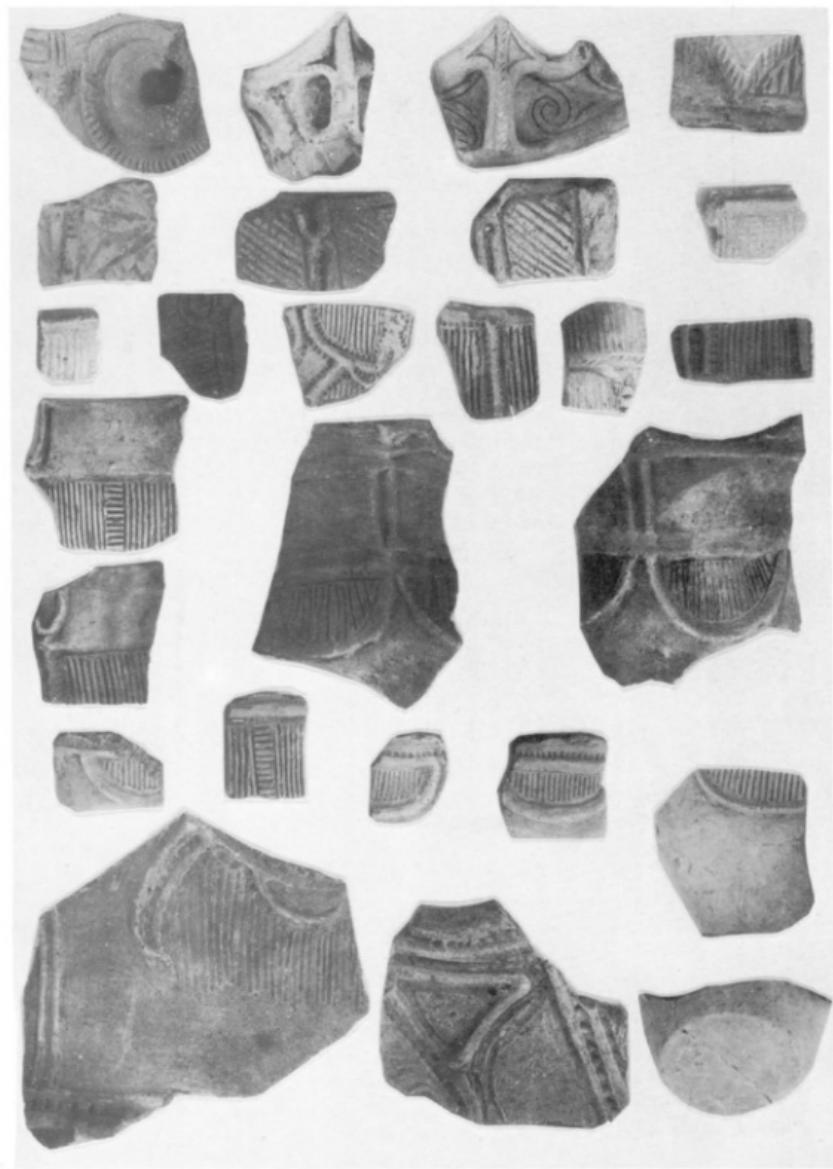
図 版



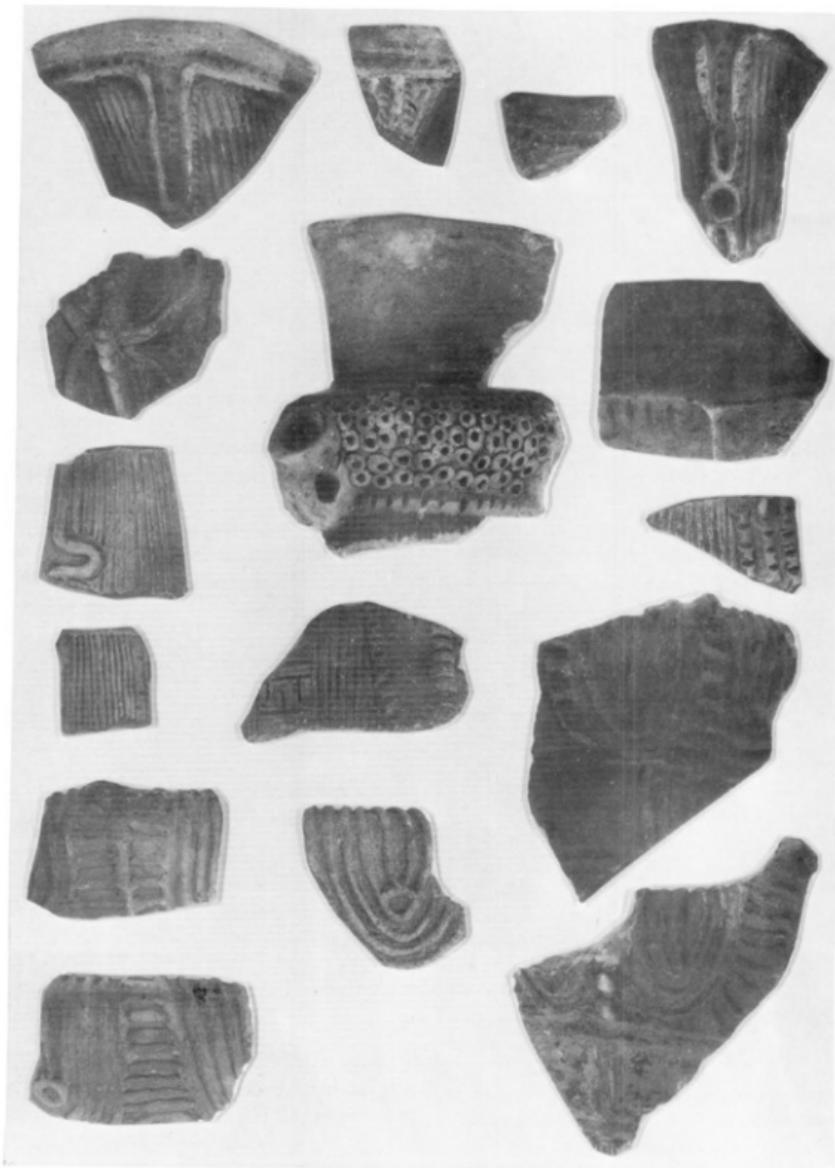
図版1 波田町中下原遺跡



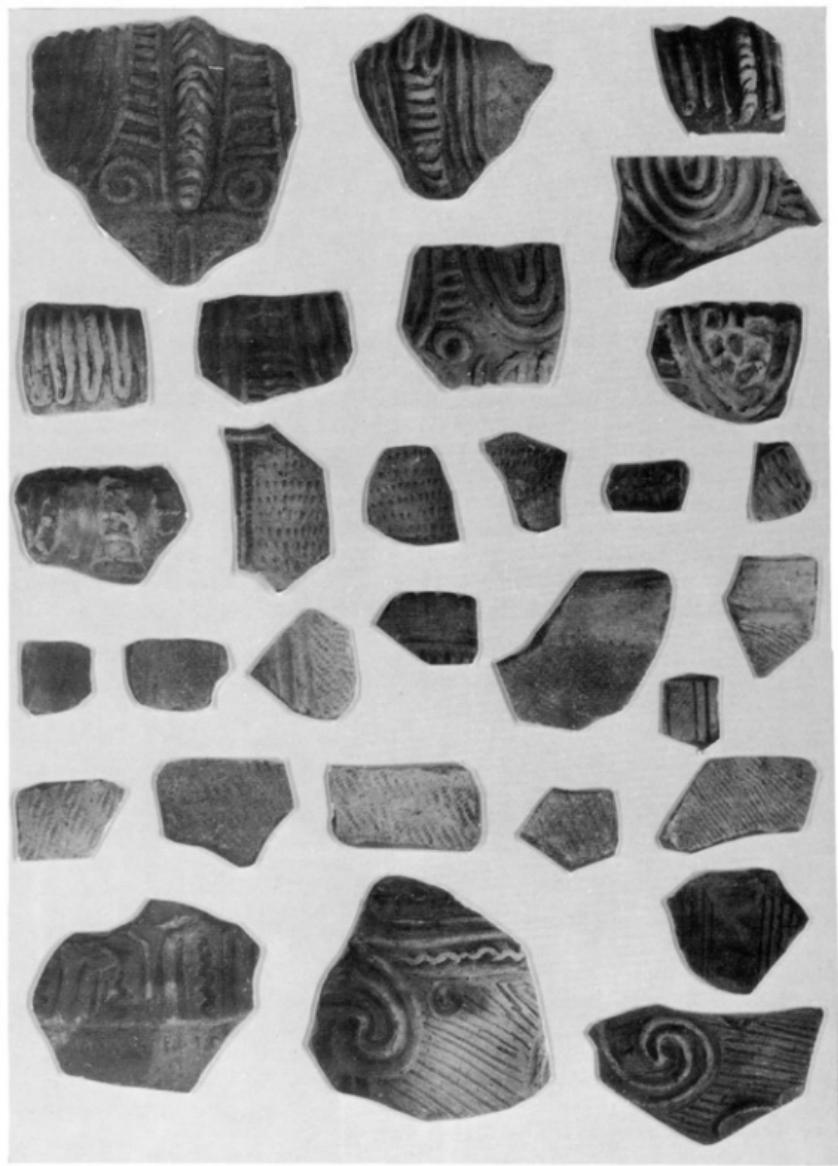
図版 2 波田町中下原遺跡



図版3 中下原10号住居址出土



図版4 中下原10号住居址出土



図版 5 中下原10号住居址出土

